

掲示板のことば

ただ

念仏して

弥陀に

たすけられ

まいらすべし

『歎異抄』

2021. 09

この言葉は、『歎異抄』第2章に記されていることばです。『歎異抄』は、親鸞聖人のお弟子さんである唯円という方が著されたとされています。第2章は、親鸞聖人が茨城にいらした頃のお弟子さん達が、命懸けで京都にいらっしゃって、親鸞聖人に直接「問い」をぶつけるという場面が描かれています。

お弟子さん達は、親鸞聖人が京都に帰ってしまわれてから時間が経ってしまったことにより、往生ということが分からなくなってしまい、直接親鸞聖人に会いに来られたのです。そのお弟子さん達に、親鸞聖人はこのようにこたえます。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり

親鸞聖人と離れて20年ほど経ったお弟子さん達に、「私親鸞においては、このように、今は亡き法然上人のお言葉を信ずるほかありません」とおっしゃったのです。このとき親鸞聖人は、法然上人と離れて50年ほどが経っていました。にもかかわらず、師である法然上人の言葉を大事に抱え、生きてこられたのです。

皆さんは、この言葉は難しいと感じますか？ 僕もかつては難しいと思い、どういことなのか分かりたいと思いました。でも、頭で理解しただけでは、きっと、この関東のお弟子さん達のように、何度も聞き返すのでしょうか。

私は、親鸞聖人は心でうなずいたのだと思います。念仏する人の生き方を目の当たりにして、ご自分もこの人のように生きていきたいと思われたのではないのでしょうか。その思いを50年忘れることなく抱き続けてきたのでしょうか。

自分の生き方を方向づけるほどの言葉、そんな言葉に出会いたいものです。

真宗大谷派 光明寺住職 小林尚樹